文章1

（入力文）

市内では最近、地元住民が地域食堂や子ども食堂を開く動きが広がっている。新型コロナウイルス禍でも試行錯誤を重ね活動するが、子ども食堂を運営するある女性の元には「感染が広がったらどう責任を取るんだ」などとの批判が相次いだという。女性は「これまでの頑張りがこんなに報われないとは思わなかった」とつぶやく。子どもが通いやすい価格帯を維持するため「正直、経営状況は厳しい」と吐露。それでも５年以上活動できたのは「子どもの居場所をつくりたい」との強い思いからだ。食堂を運営する人たちは、子どもの貧困や独居高齢者の孤立対策など地域課題に向き合っている。批判を受けてもなお「やれることをしてあげたい」と語る女性に胸が熱くなった。信念を貫く彼女らの活動を応援し続けたい。

（出力文）

最近、うちの町では、おじさんやおばさんたちが地元で子ども食堂を開いています。新型コロナウイルスの影響で大変な中でも、みんなで助け合ってやっています。でも、子ども食堂をやっているおばさんには、「もしウイルスが広がったらどうするの？」というような厳しい意見も出てきたんだって。そのおばさんは、「こんなに頑張っているのに報われないなんて思わなかった」と言っていました。食堂では、子どもたちが来やすいようにお金をあまり取らないようにしているから、「お金の問題で大変」とも話していました。でも、ずっと5年以上も頑張ってきたのは、「子どもたちにとって大切な場所を作りたい」というおばさんの思いがあるからなんだよ。食堂を開いている人たちは、子どもたちが困っていることや、一人で暮らしているおじいさんやおばあさんが寂しい思いをしないように、みんなで解決しようと頑張っています。厳しい意見があっても、「できることをやりたい」と言うおばさんのことを、私たちは応援したいですね。

（正解文）

最近、町に住んでいる人たちが、地域の人たちや子供のために食堂を開くことが増えている。新型コロナウイルスの影響で、とても大変な中、色々考え試し活動をしていた。しかし、子ども食堂で働く女性に対して人々からは「ウイルスがうつったらどうしてくれるのか」などと責める声が多く寄せられた。女性は「こんなに頑張ったことが報われないと思わなかった」と言った。子供が行きやすい値段で続けるために「正直、お金の問題がある」と言った。それでも５年以上活動することができたのは「子供たちのための大切な場所をつくりたい」という思いが強かったからだ。食堂で働いている人たちは、貧しい子供や一人で暮らしているおじいさんおばあさんがさみしい思いをしないようにすることなど、地域の問題について考えている。責められたとしても「やれることをしてあげたい」と語る女性に対して感動した。自分が正しいと思うことを守り続ける彼女らを応援し続けたい。

文章２

（入力文）

徳永さんは小学４年生のころ、母の勧めで家庭菜園を始めた。親戚らに野菜を贈ると「おいしかった」と言われ農業の喜びに目覚めた。現在、借地を含め８アールの畑を手掛けており、放課後や休日は農作業に没頭。これまで４０種を超す野菜や果物を栽培してきた。畑仕事が大好きで、農業で生計を立てようと考えている徳永さん。しかし西条の農業の将来を思ったとき、危機感を抱いたという。自身も含めて多くの農家が小規模多品目の形態で、専業農家としての経営は厳しい。彼らが高齢化などで離農すれば、地域に耕作放棄地があふれてしまう…。そこで販路を身近な市場や産直だけに固定せず、日本食人気が高まる海外輸出も視野に入れようと考えた。小規模だからこそ、農産物に丁寧に目を掛けられるという付加価値をつけ、農薬などの安全認証もクリアすることで、零細農家の農産物も世界で勝負できると踏んだ。西条農高での学習成果を生かし、自身の畑でも県独自の農業生産工程管理規格（ＧＡＰ）取得に向け準備を進めるなど、世界で勝負ができる小規模多品目農家のモデルケースになるという誓いをしたためた。９月上旬に表彰状を受け取り「評価され、うれしい」と徳永さん。農作業の様子を会員制交流サイト（ＳＮＳ）に投稿するなど情報発信にも努めており「多くの人に農業をやってみたいと思ってもらえるよう、頑張っていきたい」と将来を見据えていた。

（出力文）

徳永くんは小学4年生のとき、お母さんからすすめられて家庭菜園をはじめました。作った野菜を親戚にあげると、「おいしい」と言われて、野菜を作ることが楽しいと思うようになりました。今では、学校が終わった後や休みの日には、自分で借りた畑で野菜づくりをしています。これまでに40種類以上の野菜や果物を育ててきました。徳永くんは野菜づくりが大好きで、大人になったらお野菜を作る仕事をしたいと思っています。でも、住んでいる西条の町で野菜を作る仕事をしている人たちを見ていると、心配なことがあります。たくさんの種類の野菜を少しずつ作っている人たちが多く、その人たちが年をとって野菜を作れなくなったら、町の畑が荒れてしまうかもしれません。そこで、徳永くんは考えました。「せっかく自分たちで大事に育てた野菜なんだから、近くの市場だけでなく、外国の人たちにも食べてもらおう」と。そして、「大切に育てた野菜は安全だし、味もいい。だから、外国の人たちにも喜んでもらえるはずだ」と思いました。西条の農業高校で学んだことを生かして、自分の畑の野菜が安全だと認められる証明を取るための準備をしています。そして、「私のように少しずつたくさんの種類の野菜を作る人たちでも、世界で勝負できるんだ」ということを証明したいと思っています。この9月には、自分の努力が認められて表彰状をもらいました。「うれしい」と言う徳永くんは、インターネットで自分が野菜を作っている様子を見せて、「たくさんの人に野菜づくりをやってみたいと思ってもらえたらいいな」と思っています。

（正解文）

徳永さんは小学４年生の時、お母さんにおすすめされて家の庭で野菜などを育て始めました。親戚たちに育てた野菜をあげると「おいしかった」と言われて、農業は楽しいことであると思い始めた。今は、他の人から借りているものと合わせて、全部で８アールの広さの畑で農業をしており、放課後や休日は農業に熱中していました。今までで４０種類以上の野菜や果物を育ててきました。徳永さんは、畑で仕事をすることが大好きで、農業でお金を稼いで生活を維持しようと考えています。しかし、将来に西条で農業をすることを考えた時に、危険であると思いました。自分も含めて多くの農業が、小さな畑でさまざまな野菜を育てる方法で、農業だけをする人にとってはお金の問題で大変。彼らがおじいちゃんおばあちゃんになるなどで農業をやめてしまえば、地域に今後数年の内に野菜や果物が育てられる予定のない土地があふれてしまう…。そこで、商品を販売する場所を、近くの市場や直接お客さんに商品を売る場所だけにせずに、日本の食べ物の人気が高まる海外への販売も選択肢に入れようと考えました。小さな畑だからこそ、農業で作られるものを丁寧に育てられるという利点があり、農薬が安全なものであるということも認められることで、農業をする畑が少なく、野菜や果物を売ってお金を稼いでいる人たちの野菜や果物も世界で勝負できると思いました。西条農業高校で学んだことを生かして、自分の畑でも、自分が住んでいる県だけのものである農業生産工程管理規格（ＧＡＰ）を取るために準備を進めるなど、世界で勝負ができる小さな畑でさまざまな野菜を育てるという方法のモデルになる約束をしました。徳永さんは９月の初め頃に表彰状を受け取り、「認められて、うれしい」と言いました。農作業の様子を、会員同士が交流するサイト（ＳＮＳ）に公開するなど情報を世の中に伝えることもがんばっており、「多くの人に農業をやってみたいと思ってもらえるよう、頑張っていきたい」と思っている。

文章3

（入力文）

「とぼとぼ会」に入って２００４年にヒマラヤトレッキングツアーというものに参加した。今考えると治安も良く、いい時代だった。１１月、ヒマラヤ山脈のエベレストに連なるアンナプルナ峰とダウラギリ峰（いずれも８千メートル超）を見るためにその向かい側にある３２００メートルほどのプーンヒルという山に登るというものだった。そのために１週間かけて徒歩でその山頂まで行くのだ。高山病にならないためである。飛行機はネパールの国営航空だったが、故障で３日遅れて関空から出発した。機体はボロボロで日本の航空会社のお古だった。すぐにも墜落しそうだったが、民族服の客室乗務員が最後尾の席でワインを飲みながら雑談しているのを見たら不思議と安心した。夜着陸した真っ暗なカトマンズの空港からお湯がすぐ水になるようなホテルに直行し、翌朝プロペラ機でポカラへ移動してトレッキングが始まった。ネパールはインドと同じでカースト制度があり、ツアーについてくる人たちは、身分の高い順にガイド・料理人・ポーターとなっていて、総数がわれわれの３倍だった。テーブルや椅子も背中に担いで標高３千メートル近くまで運ぶのだった。若い人が多かったが足元を見るとあのペラペラのゴムぞうりを履いている。われわれはこれ以上ない完璧な登山スタイルで、何万円もするゴアテックスのウエアと登山靴だったが、彼らはヨレヨレのＴシャツ１枚なのだった。トレッキングのルートは石の階段が延々と続き、周りの風景は昭和初期の日本の農村を見ているようだった。ちょうど稲の刈り取りの季節で皆働いていたが、人懐こく、牛や鶏が放し飼いにされていて、とても懐かしい風景だった。そしてどんな山奥に行っても必ずそういう外国人向けのバザールが開かれていた。食事も寝る場所も全て用意され、テント泊の時も朝起きたらお茶を持ってきてくれるという、なんの苦労もない旅だった。少し後ろめたい気持ちがした。もちろんお金を払っているのだから当然と言えば当然なのだけど。帽子を二重にかぶっていても震える極寒の３２００メートルの山頂に着いて、日の出を待った。徐々に山が金色に染まって輝く姿は素晴らしく神々しかった。これを見るために何日もかけて歩いてきたのだった、こんな経験はきっと一生に一度のことだろう。けれど私には山の素晴らしさよりも、そこに暮らす人々の生活の方がずっと興味深い旅だった。行ってみなければわからない世界だった。

（出力文）

「とぼとぼ会」というグループに入って、2004年にヒマラヤの山を見に行く旅に行ったんだよ。それはとても安全で、楽しい時期だったんだ。 11月に、ヒマラヤのエベレストという大きな山の近くのアンナプルナ峰とダウラギリ峰という山を見るために、プーンヒルという山に登ったんだ。その山に登るためには、1週間くらい歩いて行かないといけなかったよ。それは、高い山に登るときに体調が悪くならないようにするためだったんだ。飛行機に乗ったんだけど、3日も遅れて出発したんだ。飛行機は古くて、壊れそうだったけど、飛行機のスタッフが楽しそうに話しているのを見て、少し安心したよ。 真っ暗なカトマンズの空港から、水がすぐ冷えるようなホテルに行って、次の日に小さな飛行機に乗って、山を見に行く旅が始まったんだ。ネパールでは、人々の地位によって仕事が決まっていて、旅のスタッフはガイドさん、料理人さん、荷物を運ぶ人がいて、全部で私たちの3倍くらいいたんだ。彼らは重いテーブルや椅子を背負って、高い山まで運んでくれたよ。私たちは高価な登山服と登山靴を着ていたけど、彼らはシンプルなＴシャツとゴムの靴を履いていたんだ。山を登る道は、石の階段がずっと続いていて、周りの風景は昔の日本の田舎のようだったよ。人々はとてもフレンドリーで、牛や鶏が自由に歩いていて、とても懐かしい光景だったよ。そして、どこへ行っても外国人向けの市場があったんだ。食事や寝る場所も全部準備してくれて、テントで寝たときも朝になるとお茶を持ってきてくれたよ。とても楽な旅だったけど、少し申し訳ない気持ちもあったよ。寒くて帽子を2つもかぶって、3200メートルの山の頂上に着いて、日の出を待ったんだ。ゆっくりと山が金色に光る姿はとても美しかったよ。これを見るために何日も歩いてきたんだ。こんな体験は一生に一度だけかもしれないね。でも、私は山の美しさよりも、そこで暮らす人々の生活のほうがもっと興味深かったよ。行ってみないとわからない世界だったんだ。

（正解文）

「とぼとぼ会」というグループに入って２００４年にヒマラヤの山に行くというものに参加しました。今考えてみると、とても安全で、いい時期だったなと思いました。１１月に、ヒマラヤ山脈のエベレストの近くのアンナプルナ峰とダウラギリ峰（いずれも８千メートル超）という山を見るという目的で、その向かい側にある３２００メートルほどのプーンヒルという山に登るというものでした。高い山に登るときに体調が悪くならないならないように、１週間かけて歩いて、その山頂まで行くのだ。ネパールにある国営航空で飛行機に乗る予定だったが、飛行機が壊れたのせいで、３日遅れて関西空港から出発したんだよ。壊れていた飛行機は、昔に日本の航空会社で使用していたものでボロボロだったんだ。すぐにも落ちそうだったが、飛行機に乗っていた乗務員が、一番後ろの席で、ワインを飲みながらお話をしているのを見たらなぜか安心したんだ。夜に着陸した真っ暗なカトマンズの空港から、お湯がすぐに水になるようなホテルに直行して、次の日の朝、飛行機でポカラへ移動して、山歩きが始まったんだ。ネパールはインドと同じで、人の地位で職業が決まるというものがあり、旅行についてくる人たちは、地位の高い順番に、ガイド・料理人・荷物を運ぶ仕事の人となっていて、人数の合計が私たちの３倍だったんだ。テーブルや椅子も背中に背負って、高さ３千メートルくらいまで運ぶのだ。年の若い人が多かったが、みんなペラペラのゴムの靴を履いていたんだ。私たちは何万円もする服と登山靴だったが、彼らは安価なＴシャツ１枚なのだったんだ。山歩きの道は石でできた階段がずっと続いて、周りの風景は昔の日本の村を見ているようだったんだ。ちょうどみんな働いていたが、とても話しやすく、牛や鶏が自由に飼われていて、とても懐かしい風景だったんだ。そしてどこへ行っても、必ず外国人専用の市場が開かれていたんだ。食事も寝る場所も全て用意されて、テントで寝た時も、起きたらお茶を持ってきてくれて、とても楽な旅だったんだ。お金を払ってはいるので当たり前かもしれないが、少し申し訳ない気持ちがしたんだ。帽子を二つかぶっていても、とても寒い３２００メートルの山の頂上に着いて、日の出を待ったんだ。だんだん山が金色に光り輝く姿はとても素晴らしかった。これを見るために、たくさん歩いてきたのだったんだ。こんな経験は、きっと生きている間に一度のことだろうと思ったんだ。しかし、私には山の素晴らしさよりも、そこで生活をする人々の方がずっと興味深かったんだ。行ってみなければわからない世界だったんだ。

文章４

（入力文）

マーケティングの世界には「プロダクトアウト」「マーケットイン」という用語がある。前者は企業が商品開発や生産に際し、作り手の論理や計画を優先させる方法を指す。新聞社に当てはめると「こういう問題を世に問うべきだ」という意識で取材をして記事を書き、紙面やウェブサイトなどで報じていく手法だ。後者は顧客の声や視点を重視した商品の企画・開発を行い、提供していく手法を指す。つまり「こうしたことをもっと読みたい、知りたい」という読者のニーズに応え、記事を出していくというやり方になる。新聞記者として過ごしてきたわが身を振り返ると、どうしてもプロダクトアウトの傾向が強かったように感じる。もちろんそこには一定の自負があったのだが、読者にそうした姿勢が支持されていただろうかと考えると、甚だ心もとない。作り手の論理を優先し、読む側の思いとずれがあったのではないかと。愛媛新聞では１月から「真相追求　みんなの特報班」（略称・みん特）という取り組みをスタートさせた。西日本新聞社（福岡市）が提唱し、全国の地方メディアに広がった「オンデマンド調査報道」（ＪＯＤ）の全国ネットワークの一翼を担うもので、暮らしの疑問や地域の困り事、行政・企業の不正告発など読者の情報提供や要望に応えて真相を取材し報じるという、マーケットインの仕組みだ。ジャーナリズムと読者ニーズのバランスを取りながら、期待に応える報道を展開していく。言うは易しだが、試行錯誤の連続になるだろう。作り手と読み手の二人三脚で、息の長い取り組みに育てていきたい。

（出力文）

「プロダクトアウト」と「マーケットイン」っていう言葉があるんだよ。プロダクトアウトっていうのは、自分たちが作るものを作る人の意見で作る方法のこと。たとえば、新聞を書く人が「この問題をみんなに知ってもらおう」と思って、記事を書く方法なんだよ。それに対して、マーケットインっていうのは、お客さんの意見を大事にして物を作る方法のこと。つまり、「この話おもしろそう！もっと知りたい！」と思うような記事を書く方法だよ。自分が新聞を書く人だったときを思い出してみると、自分はプロダクトアウトの方が強かったと思うんだ。でも、読んでくれる人がそれを好きだったかどうかはちょっとわからないな。もしかしたら、読んでくれる人の意見と自分の意見が違っていたかもしれないよね。愛媛新聞っていう新聞社では、「真相追求　みんなの特報班」っていう新しい取り組みを始めたんだ。これは、読んでくれる人の疑問や困っていること、不正の情報などを取り上げて、真相を探して記事にする方法だよ。これはマーケットインの方法だね。新聞を書く人の役割と読んでくれる人の意見をうまく合わせながら、みんなが期待するような記事を書いていくつもりだよ。これは簡単に言ってしまうけど、実際には試行錯誤を繰り返しながらやっていくんだろうね。新聞を書く人と読んでくれる人が一緒になって、長く続けられるような取り組みにしたいな。

（正解文）

「売り上げ」を上げるために、お客さんの「買いたい」気持ちを作るという世界には「プロダクトアウト」「マーケットイン」という言葉があるんだ。「プロダクトアウト」は作る人がが商品を作ったり、作る人の考えや計画を使う方法なんだよ。新聞の会社で考えると「こういう問題をみんなに知ってもらおう」と思い、記事を書いて、伝えていく方法なんだ。「マーケットイン」はお客さんの声や意見を大事にして、商品を作り、それを売っていく方法なんだよ。つまり「この話をもっと読みたい、知りたい」という記事を出していくやり方なんだ。自分が新聞を書いていた時を思い出してみると、プロダクトアウトのほうが強かったと思うんだ。しかし、本当にプロダクトアウトのほうが強かったと聞かれるとどうかわからないだ。作り人の考えを大事にして、読む人の思いとは違っていたのかもしれないな。愛媛新聞では１月から「真相追求　みんなの特報班」（略称・みん特）という取り組みを始めたんだ。暮らしの疑問や地域の困り事など、読む人の要望に応えて伝えるという、マーケットインの仕組みなんだ。新聞を書く人と読む人の「なくてはならないもの」のバランスを取りながら、期待に応える報道をしていくんだ。簡単に言っているけれど、すごく難しいことになるだろう。作る人と読む人が協力して、長く続けられる取り組みにしていきたいんだ。

文章５

（入力文）

介護の仕事をしていると、いろいろな人との出会いが生まれる。以前、ある認知症のおばあちゃんがいて「帰りますね」とよく言っていた。施設の玄関に行って靴を履き、帰る準備万端。介護職員が帰ろうとするのを遮ってしまうと、当然のごとく怒りはじめる。おばあちゃんの思考の中では、本当に家で小さい子どもが熱をだして待っていると思っている。小さい子どもはすでに大人になっており、熱をだしてはいないのだが…。私は「わかりました。大変ですね。一緒に行きます」と言って、おばあちゃんと一緒に家の方に向かって歩きだす。しばらく歩くと、おばあちゃんも疲れた表情を見せる。ラーメン店の屋外ベンチを見つけ、そこで二人で休憩する。世間話をしているうちに、おばあちゃんは「なんでここにおるん？」と言って、さっきまでのことを忘れている。そこへたまたま通りかかったふりをした施設の車が到着する。「疲れたでしょう。どうぞ乗ってください」と運転手。「ああ、よかった」とおばあちゃん。介護をしながら、あの手この手を考えていく。決まった方法などない。人は十人十色だから。

（出力文）

介護の仕事をしていると、いろんな人に会えるんだよ。前に、物忘れが激しいおばあちゃんがいて、「もう帰らなきゃ」とよく言ってたんだ。施設の玄関まで行って靴を履いて、帰る準備をするんだよ。でも、おばあちゃんが帰ろうとすると介護の人が止めると、おばあちゃんは怒っちゃうんだ。おばあちゃんは、本当にお家で小さい子どもが病気で待ってると思ってるんだよ。でも、実際はもうその子どもも大人になっていて、病気でもないんだけどね。そんな時、私は「分かったよ。大変だね。一緒に行こう」と言って、おばあちゃんと一緒にお家に向かって歩き出すんだ。少し歩くと、おばあちゃんは疲れた顔をするんだよ。そこでラーメン屋さんの外にあるベンチで一緒に休むんだ。おばあちゃんとおしゃべりをしていると、おばあちゃんは「なんでここにいるの？」って言って、さっきのことを忘れちゃうんだ。そこへ、たまたま通りかかったふりをした施設の車が来るんだ。「疲れたでしょ？車に乗って帰ろうよ」と運転手が言うと、「ああ、よかった」とおばあちゃんが言うんだ。介護の仕事をしていると、色々な工夫をしながら仕事をするんだよ。全ての人に同じ方法が通用するわけじゃないんだ。だって、人はみんな違うからね。

（正解文）

介護の仕事をしていると、たくさんの人との出会いがあるんだ。前に、ある物忘れが激しいおばあちゃんがいて「帰りますね」とよく言っていた。施設の玄関に行って靴を履いて、帰る準備を済ませていたんだ。介護の人がおばあちゃんを止めると、当たり前のようにおばあちゃんは怒りはじめるんだ。おばあちゃんの頭の中では、本当に家で小さい子どもが熱をだして待っていると思っているんだ。小さい子どもはすでに大人になっていて、熱をだして待っているわけではないんだ。私は「わかりました。大変ですね。一緒に行きますね」と言って、おばあちゃんと一緒に家の方に向かって歩きだしたんだ。しばらく歩くと、おばあちゃんも疲れた顔になるんだ。ラーメン屋の外にあるベンチを見つけて、そこで二人で休んだんだ。おばあちゃんとお話をしているうちに、おばあちゃんは「なんでここにおるん？」と言って、さっきまでのことを忘れていたんだ。そこへたまたま通りかかったふりをした施設の車が来たんだ。「疲れたでしょう。どうぞ乗ってください」と運転手が言ったんだよ。「ああ、よかった」とおばあちゃん行ったんだ。介護をしながら、色々工夫して考えていくんだ。決まった方法などないんだよ。人は人によってそれぞれみな違うからね。

文章６

（入力文）

東温市横河原。東温市で唯一、商店街という名の残る地区だ。私はこの地で生まれ育った。幼少期は多種多様な店舗が多く立ち並び、住民が集い、大きなにぎわいであふれていた記憶がある。しかし、私が会社員から写真業に転身し、他店で修業後、自店に戻った際には、すでに閉塞（へいそく）感が漂う商店街となっていた。近隣への大型店舗の出店による利用者の減少、人々のライフスタイルの変化、各店舗経営者の高齢化による店舗減少の進展…。よく聞く商店街の流れだ。もともと地域活性化には興味がなかったが、７年前に転機が訪れた。年に１度の夏の風物詩「横河原土曜夜市」を継続するか、打ち切りにするかの議論が起こり、企画運営が若手に任された。残すものは残し、変化させることは変化させる。少しずつだが中身も変わり、土曜夜市のにぎわいが大きくなってきている。そのころからだろうか。商店街の空気が全体的に少しずつ変わってきたのは。諸先輩たちがスパッと運営を若手に切り替えたことによって「自分たちがやらないと」「生まれ育ったこの地域、商店街を何とかしたい」という意識が芽生えたのかもしれない。

（出力文）

東温市横河原というところは、東温市で唯一の商店街だよ。私はここで生まれ育ったんだ。子どもの頃はいろんなお店がたくさんあって、たくさんの人が集まって、いつもにぎやかだったんだ。でも、大人になって他の仕事から写真屋さんになったときには、もう商店街は元気がなくなっていたんだ。大きなお店が近くにできたり、人々の生活が変わったり、お店の人が年をとったりして、お店が減ってしまったんだ。これはよくある商店街の話だよね。最初は地域を元気にすることに興味はなかったんだけど、７年前に大きな変化があったんだ。「横河原土曜夜市」っていう夏のイベントをこれからも続けるか、やめるか、みんなで話し合ったんだ。そして運営を若い人たちに任せることになったんだ。その結果、夜市はだんだんにぎやかになってきたんだ。その頃から、商店街全体の雰囲気が少しずつ変わってきたんだ。おじいさんおばあさんたちが運営を若い人たちに任せたおかげで、「自分たちが頑張らないと」「生まれ育ったこの地域、商店街を元気にしたい」と思うようになったんだろうな。

（正解文）

東温市横河原は東温市で、ただ一つの商店街と名前の残っている場所なんだ。私はここで生まれ育ったんだ。いろいろなお店が多くあってとてもにぎやかな場所だったんだよ。でも、近くに大きなお店ができたり、人々の生活習慣が変わっていったり、おじいちゃんおばあちゃんが増えることで店が少なくなったりして、活気がない場所になっていしまったんだ。7年前に、年に1度行われている夏のイベント「横河原土曜夜市」をやめる、続けるか、どっちにするのかを若い人たちで決めることになったんだ。若い人たちはそれを残すことにしたんだ。そこで若い人たちに決めさせたおかげで、みんなが「自分たちで何とかしなきゃ」と思うようになって、少しずつ町のにぎやかさが戻ってきたんだ。

文章7

（入力文）

お土産やプレゼントで頂いて、いくつか持っている手鏡。その中で私が一番気に入っていて、二十数年手放せないものがある。団体職員として働いていた頃は、異動のたびに私の机の引き出しに。そして今はバッグの片隅に。無いと落ち着かないし現役で役立ってくれている。それは子供たちが幼い頃、夫がお菓子の景品に応募して手に入れてくれたもの。缶詰の中に入っていた一つで、手鏡だけ私がもらったのである。ピンクでお菓子のキャラクターが描かれている。と言ってももうその姿は薄くなってほとんど見えないし、小さな持ち手は折れてしまっている。それでも私にとっては守り神。今も何とか仕事にも恵まれ出勤する私について来てくれる。子供たちは笑いながらも「お母さんの大切なもの」と思ってくれている。他県にいて今は帰省も、こちらから行くこともままならないが、それでもスマートフォンのおかげでほとんど毎日のようにＬＩＮＥ（ライン）で連絡を取り合っている。私の泣いた顔も笑った顔もみんな知っている手鏡。「これからも一緒だよ。よろしくね、手鏡さん！」

（出力文）

私の大好きな手鏡は、20年以上も使っていて、家を出るときはいつも一緒にバッグに入れています。この手鏡は、子どもたちが小さいときに、お父さんがお菓子のおまけで手に入れたものです。ピンク色で、お菓子のキャラクターが書いてあったんだけど、もうだいぶ色が薄くなって、手元も折れてしまっています。でも、それでも私にとっては、とても大切なものです。子どもたちは遠くに住んでいますが、毎日スマホでお話ししています。私が泣いたり、笑ったりする顔を、この手鏡は全部見てきました。これからもずっと一緒にいてほしいな、と思っています。

（正解文）

お土産やプレゼントでもらった手鏡がいくつかある。その中で一番気に入っていて、20年以上使っているものがある。それは子供たちがまだ小さいときに、お父さんがお菓子のおまけを使って手に入れてくれたものなんだ。それはピンク色でお菓子のキャラクターが書かれているんだ。でも、今は薄くなって見えなくなっているし、小さな持ち手は壊れてしまっているんだ。それでもそれは私にとってとても大切なモノなんだよ。子供達には笑われるがそれが大切なモノであるということをわかってくれているんだ。今は遠くにいて会えないけど、ラインで連絡は取っているんだ。私のことをよく知ってくれている手鏡をこれからも大切にしたい。

文章８

（入力文）

松山市北条地区の秋祭り最終日の１３日、同市北条辻の明星川で、宮入り前にみこしを清める神事「みこしみそぎ」があり、かき手がみこしを豪快に川に投げ入れた。台風１９号の影響で大雨が降る中、午後３時４０分ごろ、地域巡行を終えたみこし２体が明星川に到着。全身びしょぬれになったかき手がみこし１体を川に投げ込んでは引き上げ、５回、６回と繰り返し、水しぶきが上がるたびに見物客から歓声が上がった。みこしは例年、北条沖の鹿島神社に宮入りするが、今年は大雨で船が出せないため、１４日に納めた。鹿島神社氏子青年会の塩谷健太郎さん（４０）は「寒さに震えながらの祭りになったが、無事巡行を終えられてよかった」と笑顔で話した。

（正解文）松山市の北条という場所で秋祭りが行われている。その秋祭りの最終日、松山市の北条辻の明星川という川で、悪いものを払う意味で行われる「みこしみそぎ」があるんだ。みこし持つ人がみこしをその川へ投げたんだ。台風の影響でとても雨が降っている中、その地域を回っていた２つのみこしがそこに到着した。全身びしゃびしゃになったみこしを持つ人が１つみこしを川に投げた。そしてそれを川から引き上げる。これを５，６回繰り返して、水しぶきが上がるたびに、それを見ている人たちから歓声が上がったんだ。みこしは毎年、北条の沖の鹿島神社に持っていくんだけれど、今年は雨のせいで船が出せなかった。鹿島神社氏子青年会の塩谷健太郎は「とても寒い中で祭りが行われたけれど、無事に終わることができてよかったよ」と笑って話したんだ。